開館記念 ゴッホ、モンドリアンから今日まで
オランダ絵画の100年展
11月10日まで開催

ヨーロッパのほぼ中心に位置し、風車がある干拓地の風景でなじみ深いオランダは、一六〇〇年、オランダ船「リーフデ号」の漂着以来、日本と深い関係を保ってきました。

文化の面では、カバン、ランドセル、オルゴール―など数多いオランダ語が日常の用語として、日本で使われています。また、オランダのデルフト焼には、有田焼や伊万里焼の影響が見いだせます。四世紀にもおよぶ両国の交流は、オランダをとても身近な国に感じさせます。

開館記念「オランダ絵画の100年展」は、アムステルダム市立美術館の所蔵品を中心に展示します。同美術館は、芸術を愛する市民のリーダーシップにより、一八九五年に誕生しました。創設当初から常に、その時代における内外の〝現代美術〟に目を向けてきました。今世紀初頭には、まだ世に余り知られていなかったゴッホの展覧会を開いたり、〝近代絵画の父〟と呼ばれるセザンヌを紹介したりしました。

開館記念展は、ゴッホから今日までオランダ絵画百年の歩みを「表現主義的傾向の流れ」「モンドリアン以後の抽象的傾向の流れ」「写実主義的傾向の流れ」「オランダ絵画の新しい動向」の四つの流れに沿って、分りやすく紹介するものです。

チューリップが結ぶ 不思議な縁

爽秋（そうしゅう）十月十三日市民待望の美術館ついに誕生！こけら落としとして開かれるのが「オランダ絵画の100年展」です。アムステルダム市立美術館の戦後美術のコレクションと、国立ゴッホ美術館から特別のご厚意でお借りしたゴッホの代表作七点、あわせて三十五作家百点の作品が展示されます。私たちは、ゴッホ以後のオランダ絵画百年の歩みを跡づけ、オランダ美術の特質とは何か、を理解する初めての機会を持つことになるでしょう。

新潟とオランダとの関わりについては、やはりまず第一にあげられるのはチューリップの球根輸入と栽培です。わが新潟市の〝シンボル・フラワー〟にもなっているこの花の球根栽培が日本で初めて成功したのは、新潟の沿岸低地、砂質土壌がオランダと共通する風土性によるものです。新潟もアムステルダムも、ともに砂地の上に貿易港として発展した街であることは周知の事実です。私たちがオランダ絵画百年の展開のさまを眺めて、この彼我（ひが）の風土の類似性を超えて、そこに学ぶものがあるとすれば十七世紀の画家レンブラントやフェルメール以来培われてきた芸術の精神的な風土性ではないでしょうか。深い人間性の洞察、内省的な精神、光と影の重視、自然観察の謙虚さ、自然の事象の奥に普遍の原理を見出そうとする真理追求の態度などがそれであります。

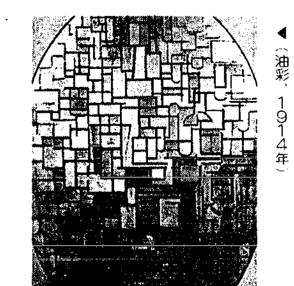
ゴッホの内景表出の激しさ、モンドリアンの抽象への意志、トーロップの現実幻化のドラマ、そして新世代の多彩な実験―のさまをぜひ、この機会に市民のみなさんにご覧いただきたいと存じます。

（林 紀一郎市美術館館長）

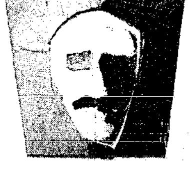
四つの流れを公開

▶マジックリアリズムの画家 カレル・ウィリンク「アルカディアの風景」（油彩、1935年）

▲〝炎の人〟ゴッホ「ふたりの人物のいるオーヴェール近郊の農場」（油彩、1890年）



◀抽象絵画の先駆者モンドリアン 絵画Ⅲ「楕円形のコンポジション」（油彩、1914年）



▶今後の活躍が期待される エモー・フェルケルク「ジェームス・ジョイスの肖像習作」（油彩、1982年）

表現主義的傾向の流れ

〝炎の人〟と呼ばれる天才画家ゴッホ（一八五三〜一八九〇年）のほか、エコール・ド・パリの画家として日本にもよく知られているファン・ドンゲン（一八七七〜一九六八年）の作品も展示します。

この流れの中で取り上げる「コブラ」運動は、第二次世界大戦後のヨーロッパ絵画の領域に新しい生命力をもたらし、国際的に高く評価されています。コブラという言葉は、運動に参加した作家の出身国の首都（デンマーク＝コペンハーゲン、ベルギー＝ブリュッセル、オランダ＝アムステルダム）の頭文字を続けた呼称です。

モンドリアン以後の抽象的傾向の流れ

抽象絵画の先駆者モンドリアン（一八七二〜一九四四年）に代表される「デ・スティル」の様式による抽象芸術に接することができます。

デ・スティルとは、オランダ語で「様式」という意味です。赤・青・黄の三原色と無彩色、直角と平面との組み合わせを追求、純粋な造形芸術の実現を目指そうというものでした。この傾向に属する作家の表現は、現在の都市建築、イスなど家具のデザインにも反映されています。

写実主義的傾向の流れ

一九二〇年代後半に現われた写実主義（マジックリアリズム）から、六〇年代の新しい写実的傾向の作品を展示します。

マジックリアリズムの作品は、第一次、第二次両世界大戦間の社会不安や危機感を反映して、画面に無気味な雰囲気を漂わせ、冷徹な眼ですみずみまで均質に描写されています。

第二次世界大戦後の作品はアメリカ美術の影響もあり、現実の断片を画面に写真のように定着させる表現となっています。

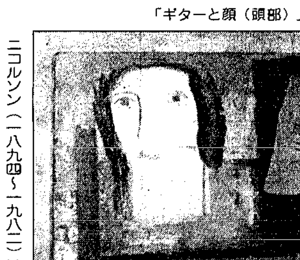
オランダ絵画の新しい動向

第二次世界大戦後に生まれた若い作家の作品には、既成の絵画の概念で枠づけできない「新しい傾向」が見られます。表現方法は多種多様で、素材の選択、色彩の追求など作家の視点も異なります。これらの表現は、国境を越えた世界共通の〝現代芸術のことば〟として、私たちに語られているのです。

収蔵品 美術館の〝顔〟 ボナール作「浴室の裸婦」今日公開！

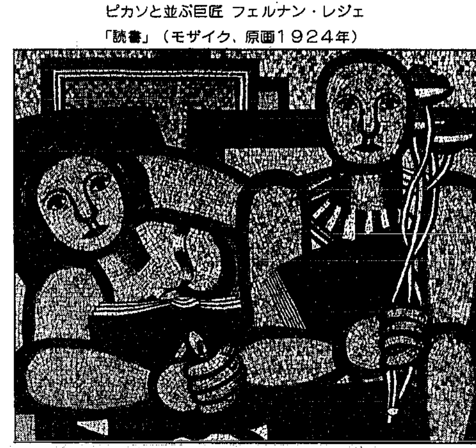
現在、市美術館が収蔵している作品数は三百九十七点です。海外作家では、市美術館の〝顔〟とも言えるピエール・ボナール（一八六七〜一九四七年）の「浴室の裸婦」、〝秘蔵の一点〟として全国の美術ファンから注目されているベン・ニコルソン（一八九四〜一九八二年）の「ギターと顔（頭部）」、ピカソと並ぶ立体派の巨匠フェルナン・レジェ（一八八一〜一九五五年）のモザイク画「読書」、ロシア出身の彫刻家オシップ・ザッキン（一八九〇〜一九六七年）の「青年の頭部」など七点。国内作家では、日本の近代彫刻の巨匠で詩人としても有名な高村光太郎（一八八三〜一九五六年）の「薄命児頭部」、現代の風俗を鮮やかな色彩で描く絹谷幸二（一九四三年〜）の大作「ダリア・ガナッシィ―二の肖像」など百二十三点。郷土にゆかりのある作家では、新潟市出身で日展の重鎮・安宅扇雄（一九〇二年〜）の「制作」、五泉市出身で国際的に高く評価されている阿部展也（一九一三〜一九七一年）の「作品」など二百六十七点です。これらの収蔵品はテーマを設け、順次、公開展示されることになっています。

イギリスを代表する画家 ベン・ニコルソン「ギターと顔（頭部）」（油彩、1932年）



ニコルソン（一八九四〜一九八二）は、白を基調とした簡素な画面に深い精神性をたたえた抽象・半具象的作品で知られるイギリスの画家です。この作品は、彼が女流彫刻家ヘップワースと結婚して間もないころに描いたものです。この絵の傍らでくつろぐ画家を写した写真が残っており、作者自身深い愛着を抱いていた作品であることが分かります。

ピカソと並ぶ巨匠 フェルナン・レジェ「読書」（モザイク、原画1924年）



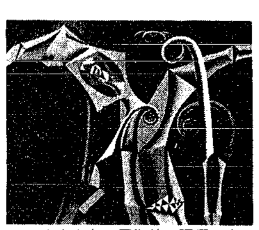
レジェ（一八八一〜一九五五年）はフランスに生まれ、立体派の運動に参加しました。その後、動きを追求した表現に進み、晩年は明快な色彩と太い輪郭線による力強い群像を多く描きました。この作品は、パリ国立近代美術館所蔵の原画をもとに、レジェの死後、未亡人の監修により制作されたモザイク。モニュメンタルで親しみやすい空間が生み出されており、常設展ロビーに展示されます。

〝色彩の魔術師〟ピエール・ボナール「浴室の裸婦」（油彩、1907年）

ボナール（一八六七〜一九四七年）は、印象主義を受けついだ最もすぐれた作家の一人と言われ、フランス近代絵画の巨匠です。彼は、生きる喜びをたたえた色彩表現により、〝色彩の魔術師〟と呼ばれています。この作品は、「室内の裸婦」「浴室の裸婦」などを集中的に探求しはじめた時期の代表作。内側から温く輝くような裸婦の肢体、それを包む宝石のような色彩に、ボナールの芸術があますところなく表わされています。

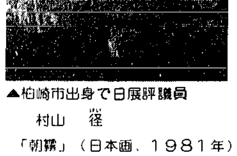
ロシア出身の彫刻家 オシップ・ザッキン「青年の頭部」（木彫、1927年）

ザッキン（一八九〇〜一九六七年）は、ロシアに生まれフランスに移り、立体派の彫刻家として知られるようになりました。その後、素朴な力強さを持つ固有の様式を造りだしました。この頭像は、比較的初期の作品です。若々しい力強さを秘めた表情には、彼が共感を抱いた黒人彫刻の影響が、明らかに認められます。



▲五泉市出身で国際的に評価の高い 阿部 展也「作品」（油彩、1950年）

▲新潟市出身で日展の重鎮 安宅 扇雄「制作」（油彩、1984年）

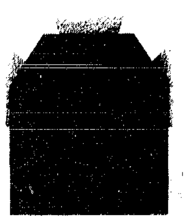


▲柏崎市出身で日展評議員 村山 径「朝霧」（日本画、1981年）

◀日本の近代彫刻の巨匠 高村 光太郎「薄命児頭部」（ブロンズ、1905年）

◀現代の風俗を鮮やかな色彩で描く 絹谷 幸二「ダリア・ガナッシィ―二の肖像」（アレスコ・ストラッポ、1975年）

◀現代日本を代表する画家 斉藤 義重「WORK(Whit&Red)」（油彩、1963年）



◀緊張感あふれる空間構成 菅井 汲「太陽の森」（版画、1967年）

3月までのご案内

■展覧会

展覧会	期間	内容
常設展Ⅰ 新潟の作家たち展	10月13日〜12月27日	新潟を代表する郷土出身作家、新潟にゆかりのある作家の洋画や日本画を約二十点展示。
常設展Ⅱ 現代美術の展望展	1月5日〜3月30日	国内・国外の戦後の作品から絵画、版画、彫塑を約二十点展示。
企画展Ⅰ 現代版画の展望展	12月15日〜1月15日	戦後の日本の代表的な版画家の作品約百点を展示。
企画展Ⅱ パウル・クレー展	2月13日〜3月16日	巨匠クレーが、スイス亡命中（一九三三〜一九四〇年）に制作した作品約百五十点を展示。

第17回 新潟市美術展 11月21日〜12月1日

■講座（時間は午後2時〜4時）

講座	日程	内容
美術史Ⅰ 近代絵画	10/30〜12/25毎(水)	印象派から今世紀前半の美術についてスライドやテキストを使用し解説。定員百二十人
美術史Ⅱ 現代絵画	1/22〜3/26毎(水)	第二次世界大戦後の美術の動向をスライドやテキストを使用し解説。
実習Ⅰ 銅版画の制作	11/1〜12/20毎(金)	銅版画の制作について基礎から学ぶ。定員三十人
実習Ⅱ 木彫りによる工芸	1/11〜3/29毎(土)	木彫塗装仕上げによるパネルの制作を、実習を通して学ぶ。

※「近代絵画」「銅版画の制作」の申し込みは、往復はがきに講座名、住所、氏名、年齢、性別、職業を記入し、市美術館（〒951 西大畑町五一九一―一九）へ。締め切りは十月十六日。

■観覧料

区分		個人	団体（20人以上）
開館記念「オランダ絵画の100年展」	一般	800円	700円
	大．高生	600円	500円
	小．中学生	400円	300円
常設展Ⅰ「新潟の作家たち展」	一般	200円	160円
	大．高生	150円	110円
	小．中学生	100円	70円

■休館日

毎週月曜日（祝日、振り替え休日の場合は火曜日）、祝日や振り替え休日の翌日（日曜日にあたる場合は除く）、12月28日〜1月4日
（10月14日、11月4日は開館 11月5日は休館）

■開館時間

午前9時〜午後4時半